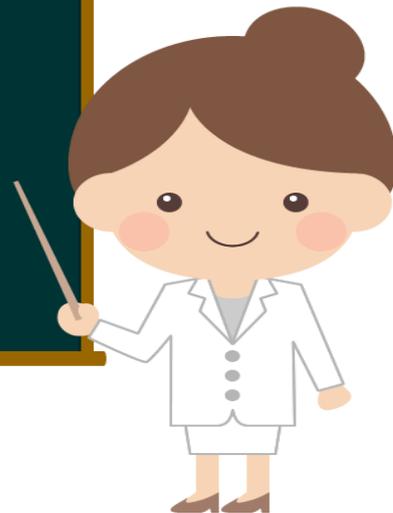


今回は

肺炎

のお話です。

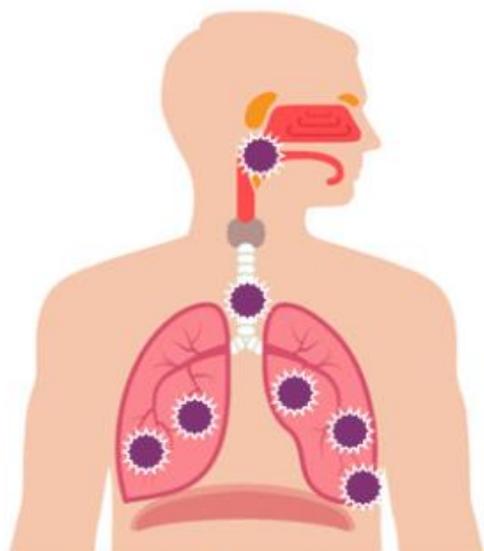


今回は、「肺炎」についてお伝えしていきます。

肺炎は怖い、とか「万病のもと」とも言われていますが、改めて肺炎とはどのような病気か見てみましょう。

肺炎とは、気道を通して侵入した

細菌や**ウイルス**などの病原体が肺内で増殖し、炎症を引き起こされた状態を示します。呼吸器系の病気の中では、珍しいものではありません。



図：細菌やウイルスはのどを通過して肺に侵入する

画像：Copyright © Ewelina Kowalska / 123RF 写真素材 一部改変

この細菌やウイルスは、鼻や口から侵入し、喉を経由して肺の中に入り込みます。

健康であれば、これらの細菌やウイルスを鼻や喉などでブロックします。

しかし、何らかの状態で免疫力が落ちている時や風邪をひいている時などは、細菌やウイルスが鼻や喉、気管を通り抜けて肺まで侵入し、炎症を引き起こしてしまいます。この状態を「肺炎」と呼びます。

私たちは、**誰でも**不規則な生活習慣や過度なストレス、飲酒や喫煙などの望ましくない「生活習慣」により免疫力が低下しうる環境で生活しています。

一方で、肺炎は

「命にかかわる」病気でもあります。

肺炎は、日本人の死亡原因の第5位です。(1位:悪性腫瘍(がん)、2位:心疾患、3位:老衰、4位:脳血管疾患)となっています。

(出典:令和3年(2021)人口動態統計月報年計(概数)の概況より)

肺炎は**どこでかかったか**によって、

「市中肺炎」と「院内肺炎」に大き

く分けられます。

市中肺炎は自宅など日常の生活の中で発症した肺炎、院内肺炎は病院に入院後 48 時間以降に発症した肺炎と分類されます。さらに、市中肺炎のなかで

“細菌性肺炎”と“非定型肺炎”

に分かれており、その型により治療に使用する薬を分けていることが多いです。

「誰でも」かかりうる肺炎ですが、

次のような持病をお持ちの方や状態は肺炎にかかりやすく、治りにくいことも分かっています。

- * 脳血管障害
- * 呼吸器疾患(肺気腫、肺結核後遺症、間質性肺炎など)
- * 心疾患
- * 腎疾患
- * 糖尿病
- * 悪性腫瘍
- * 先天的に免疫が不全の状態(原発性免疫不全症候群(PID))
- * 後天的に免疫が抑制された状態(ステロイドや免疫抑制剤、抗癌剤を使用中)
- * 誤嚥(ごえん:飲食物や唾液が誤って気管に入ってしまう状態)など

【肺炎の病原菌】

肺炎球菌、インフルエンザ菌、肺炎マイコプラズマ、肺炎クラミジア、MRSA、緑膿菌など治療効果が低い菌も原因となります。

主な症状としては、

発熱、咳、膿性痰

他にも、筋肉痛、腹痛、下痢症状など「一般的な風邪の症状」と見分けにくいいため、注意が必要です。

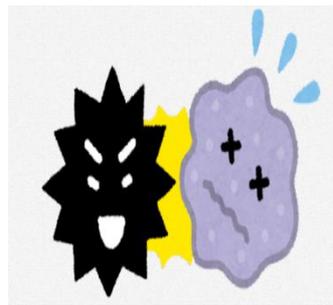


風邪症状が治っても、持続する倦怠感、食欲不振の場合や、無熱肺炎といって発熱しない状態で肺炎になっている場合もあります。

もともと持っている「慢性疾患が原因」

で肺炎になりやすくなります。

また、呼吸器の疾患がある方は、通常状態が気道や肺に炎症を起こしている状態のため、肺炎のウイルスが侵入すると感染しやすい状態といえるでしょう。



予防という点では、特に **65 歳以上**の方はインフルエンザワクチンや肺炎球菌ワクチンの接種が重要となります。

インフルエンザに感染すると、気道の粘膜が荒れて細菌などの病原体が侵入しやすい状態ですので、インフルエンザワクチンは、肺炎を合併することを低減できることが期待できます。

ただし、肺炎球菌ワクチンは、肺炎を完全に予防できるわけではないため注意が必要です。

また肺炎の原因として誤嚥の関与がある場合には、食事中や食後に座位を保つことや、口腔内を清潔に保つ、誤嚥を悪化させる可能性がある薬などを減量・中止するといった予防法があります。

ですが、「**自己判断は禁物**」です。

高齢者だけになると思われがちな肺炎ですが、誰でもなるという認識を持ちながら予防し、早期発見、早期治療をできるようにしましょう。

次回は

脳卒中

についてお話しします。

